

北支山西省駐屯記

高見沢

昇

野方六丁目

北支派遣軍へ

私は大正九年九月十九日に生まれ、昭和十六年一月に現役兵として近衛歩兵第一連隊に入営した。生年月日に九が重なったので九重（宮城）守護の任に就いたと信じている。

翌十七年七月、見習士官のとき、野戦小隊長として北支（中国北部）山西省の「勝」兵団に転属し、後日、本土防衛要員として、終戦直前に内地の土を踏むまで、山西省中央部の汾陽、文水、交城、洪洞の各県に駐留した。

山西省は、私の郷里信州のように山岳重畳、酷暑厳寒の地であり、夏の雨季のほかは乾燥して、小麦、高粱の畑作地帯が続く、山に樹木なく、風景は黄色である。西隣の陝西省には、共產党の根拠地延安があり、前面には国民党系の山西軍が盤踞していた。北支戦線から数次にわたる部隊の南方抽出のため、日本軍は広く分散し、孤立状態となり、都市（点）と鉄道（線）を守るのに精一杯であった。

春

砂丘に雪も消え始めて
黄土に草の萌ゆるとき

大行の險踏み破り

野に山に伏す討匪行

昭和十八年四月「十八春大行作戦」に初年兵教育を中断し小隊長として従軍、一か月余り、敵影を求めて山地を彷徨した。食も水も乏しく、中隊長が倒れたあと、中隊長代理として作戦終了後駐屯地（交城）へ帰還したが、私もまた栄養失調症で、太原陸軍病院へ入院療養の身となり、はじめて白衣を着た。

夏

雷とどろきて滝と落つ

濁流狂い浪猛る

黄河を越えて敵追えば

砲火に震う麦の波

昭和十九年七月、豪雨で増水した黄河支流の汾河西方地区の

中国合作社（日本の農協に相当）による麦収穫援護に小隊長として出動した。小麦はこの地方の主食で、農民からの供出をめぐって、山西軍との食糧獲得の生存戦争が烈しく行われた。農民の収穫した小麦は、日本軍の「トーチカ」内に保管され、たまと洪洞にある合作社倉庫に運搬する。

この小麦運搬の途上を山西軍に襲撃され、これに応戦している間に、小麦を積んだ馬車が逃げて、全部敵の手に渡ったことがあった。我が小隊の装備が小銃と軽機関銃のみなのに対し、敵は迫撃砲二門で我が小隊の前後を砲撃して来たが、私は日本軍と山西軍にはさまれた農民が気の毒でならなかった。

秋

黄昏低く狭霧こめ

高粱枯れて風ぞ染む

北斗の光眉近く

固き守りの同蒲線

中隊の警備地域内を南北に流れる汾河に沿って、同蒲線（華北交通）が走っているが、沿線五つの駅にそれぞれ一個分隊を警備に派遣していた。敵と直接対峙するトーチカ生活と違って、治安も良く、民間人との接触もあって、歴戦の兵もしばしの休養の場となった。ところが昭和十九年十月の白昼、在中國米空軍のグラマン機が洪洞駅に襲撃、貨物列車の機関車を攻撃し、機関士は死亡、機関車は破壊され運行不能となった。これに応

戦する我が守備隊は小銃による対空射撃のみ、この頃から鉄道は、昼は敵機の空襲、夜はゲリラによる線路の破壊が相つぎ、不通となるが多かった。また駅も夜間に襲撃されるようになり、私も救援にしばしば出動した。

冬

連枝の山も汾水も

一物あらぬ銀世界

まぶたも凍り吹雪く夜は

征野に結ぶ飯の夢

昭和二〇年二月、「勝」兵団の南方移動のあとを受けた「将」兵団に転出。洪洞地区から北上して、汾陽、分水地区警備となり、従来の二倍の面積を、半分の兵力で守ることとなった。

「攻撃は最良の防御なり」の方針で、中隊長が主力を率いて敵根拠地を夜間攻撃したとき、敵のしかけた地雷により、右脚切断の重傷を負い、後送入院となった。私は一個小隊とともに、トーチカで大敵と対峙してこの報告を受け、中隊長代理として中隊本部に移り、弔い合戦により敵根拠地を覆滅するのであるが、この戦記はまたの機会にしたい。

本土防衛のため内地へ

昭和二〇年四月文水県北方地区の山岳地帯で共産八路軍との戦闘中、無線で内地の東部軍に転属の命令を受けた。同蒲線が不通のため、止むなく自費で汾陽から文水經由太原に出るバス

を貸切り、敵中を突破した。太原からは北京、奉天、釜山と昼
夜鉄道を乗り継いだ。

釜山から博多に向かう連絡船内で、九死に一生を得た北支の
思い出を噛みしめた。

